

P-91 腹腔鏡下卵巣チョコレート嚢胞摘出術後の卵巣機能および術後癒着形成に関する検討

順天堂大学

武内裕之, 淡路正則, 荻島大貴, 中野義宏,
三橋直樹, 桑原慶紀

【目的】近年、卵巣チョコレート嚢胞(CC)に腹腔鏡下手術が導入されてきた。CCは若年者に好発するため手術操作が妊孕性に及ぼす影響が懸念される。そこで、腹腔鏡下嚢胞摘出術が術後の卵巣機能、付属器周囲癒着形成にあたる影響を検討した。【方法】腹腔鏡下症嚢胞摘出術を受けた97例、121嚢胞を対象とした。手術手技は、CCの癒着剥離を行った後、嚢胞壁を切開し、内容を吸引洗浄し、把持鉗子により嚢胞壁を卵巣被膜から剥離、除去した。摘出した55嚢胞壁については任意の3カ所を切出しHE染色した。3切片の全視野を鏡検し、切除した嚢胞壁に遺残する卵胞数をカウントした。不妊外来で経過を診た10症例についてはclomiphene100mg/日による排卵誘発を行い、術前(13周期)、術後(18周期)の排卵期の卵胞数、E2値、黄体期のP4値を比較検討した。second look laparoscopy(SLL)を行った20症例、30嚢胞では初回手術時とSLL時の癒着スコアを比較した。

【成績】嚢胞壁に遺残する卵胞は、5個未満が44/55嚢胞、5~10個が8/55嚢胞、10個以上が3/55嚢胞であり、手術時に切除される卵胞はごく少数であった。術前、術後の排卵誘発の結果はそれぞれ卵胞数が 2.2 ± 1.6 (mean \pm SD), 3.4 ± 2.0 個, E2値が 1152 ± 900 , 1486 ± 1016 pg/ml, P4値が 28.0 ± 8.4 , 36.5 ± 43.3 ng/mlであり、手術後の方が排卵誘発効果は高かった。初回手術時とSLL時における癒着スコアはそれぞれ 12.3 ± 9.0 , 10.4 ± 9.1 であり、術後に癒着スコアが悪化したのは9/25嚢胞であった。【結論】ECにおける腹腔鏡下嚢胞摘出術は手術侵襲が小さく、妊孕性の改善に適した手技であることが示された。

P-92 実験的子宮内膜症における薬物治療および手術治療の腹腔内環境への効果の検討

防衛医大

村上充剛、水本賀文、古谷健一、徳岡 晋、
大山さおり、三井千栄子、牧村紀子、平田純子、
菊池義公、永田一郎

【目的】子宮内膜症(内膜症)ではnatural killer(NK)活性の抑制が報告されているが、薬物治療や手術治療施行後のNK活性の変化や組織学的変化を臨床的に示すことは困難である。今回ラット内膜症モデル(モデル)において治療前後のNK活性の変化および病巣の組織学的変化について検討した。【方法】①モデル作製法:ラット子宮内膜を外科的に腹腔内に移植しモデルを作製した。脂肪組織移植例を対照とした。②NK活性測定法:各治療前後のNK活性をラット脾細胞の ^{51}Cr release assayによって測定した。③薬物治療: danazol(Dz)100mg/kg/dayまたはbuserelin(Bu)25mg/kg/dayを4週間連続投与した。④手術治療:子宮内膜移植後4週間で再開腹して移植子宮内膜を切除した。⑤形態学的検討:薬物治療前後の嚢胞体積を測定し、組織中DNA量も検討した。⑥腹膜の器官培養:モデルの非移植部位の腹膜を24時間培養後、上清を健常ラット脾細胞に添加しNK活性を測定した。【成績】①モデルの脾細胞NK活性は $32.6 \pm 3.0\%$ (n=4)であり対照の $42.6 \pm 3.0\%$ (n=4)と比較して有意(p<0.05)に低下していたが、手術治療によってNK活性は $44.6 \pm 4.0\%$ (n=4)と有意(p<0.05)に上昇した。②薬物治療により内膜症嚢胞は縮小したが、組織中DNA量は非薬物治療例と差がなく細胞数には変化がなかった。③薬物治療により一部にNK活性の回復が認められたが、病巣付近の腹膜培養上清には依然強いNK活性抑制がみられた。【結論】実験モデルにおいて薬物治療は内膜症病変を縮小させるがこれは細胞数の減少ではなく、NK活性の変化からみて腹腔内局所環境の改善には薬物治療より手術治療の方が有用であると考えられた。